

世界は聖書でできている
歴史を貫く二大原則

2025/08/13

菅平バイブルキャンプ 高原 剛一郎 氏

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

皆さん、こんばんは。私はこの夏の菅平バイブルキャンプ、今回で27回目なんです。27年前から毎年夏1回も欠かすことなく、いつもお招きを頂いて、光栄の気持ちでいっぱいです。今回は2泊3日のキャンプですが、27年前は5泊6日だったんですね。前半の2泊3日はクリスチャン向けの学びのキャンプ。後半の3泊4日はノンクリスチャンのための福音キャンプ。それも6回連続のメッセージ。とても今はできません。その時のこと、いろいろ思い出があります。

このヘルモン山荘の向かいに、東京トラック協同組合の保養所がありました。今は更地になってます。おそらく東京の運送業界の方々の保養所だと思いますが、ある時夜の集會に、その保養所の方がフラッと入って来られて、しかも寝間着なんです。でね、一杯引っかけてる。「うわあ、大丈夫かな」と思ったんですが、よく聞いてくださったんです。そして次の日、朝の集會にも来られたんですね。すごいなと。

お昼間、一人で静まるために散歩に出た時、その方とバッタリ会ったんです。「ああ、聖書の先生！」と言われまして、「誰？」後ろ見たりして「俺か」と。「いい話、聞かせてもらいました。私には一人娘がいるんですが、クリスチャンになりました。『家は仏教だから、クリスチャンなんかならんでもいい』と言ったけど、『なるとかならないとかの問題じゃなくて、救い主が出会ってくださったんだ』とか、変なこと言ってるんです。その娘が数年前にクリスチャンと結婚したんですけど、その相手があなたによく似てるんですよ」私はね、「そんなイケメンですか？」と…言いませんよ。心で思ってるだけで。

立ち話で少しお話ししたんですが最後に、「娘の結婚相手にそっくりな人が向かいの施設で話をしてるなんて、これは仏さんのご縁だ」違うやろ！神の導きやろ！分かったような分からんような。でも、人生の中で、聖書の福音を集中して聞く機会があつて良かったなと思つてます。

ある方は、奥様がクリスチャンで、ご主人はノンクリスチャン。普段は仲良し夫婦ですが、信仰の話になると険悪なムードになる。自分で説明するのは限界かなと、「1回でいいから菅平バイブルキャンプに来てください。来てください」「面倒くさい。面倒くさい」でも、あんまり言うので根負けして、ある夏来られたんです。面と向かって、「ここに来るのは面倒くさかった」と言われて。でも、すごく心開いて聞いてくださって、その時は信仰告白には至らなかったけど「ずいぶん誤解が解けました」そして、下山後しばらくして、イエス・キリストを信じられたんですね。

その方と何年かぶりに再会した時、「あの時は面倒くさい言ってたけど、今は家族

全員クリスチャンで、職場の方も集会に導いて、素晴らしいですね。なんでそんなに面倒くさいと思ったんでしょうかね」と。ちょっといじったろうと思って。

「お風呂入る前に、疲れてるから面倒くさいと言ってても、風呂出た後に面倒くさがる人っていないじゃないですか。入った後にさっぱりして気持ちよかったら、面倒くさいと言ったことすら忘れるもんですよ。私は、キリストの中に自分が求めている答えがなかったら、多分クリスチャンになってからでも面倒くさがったと思います。だけど、私が探し求めていたものが、実は私を捜し求めていてくださったことが分かった」と言われたんです。

それぞれ人生の中で、こんな答えが欲しい、あんな答えが欲しいと思っている。それを事業の成功・やりがい・趣味の中に見つけようとする人がいますが、私たちが求めている本当の答えは、キリストの中にあります。そして、キリストが私たちを捜し求めておられるんです。すごくいい会話、深い会話ができるようになったんですが、その方がなぜそんなに行くのを嫌がったのかよくよく聞くと、奥様のご主人の質問に、全部聖書で言い返すそうです。それは正しいと言えば正しいんですけどね。

「神なんかいないよ」「でも、聖書にはこう書いてあります」「目に見えないものなんかないよ」「でも、聖書にはこう書いてあります。『目に見えるものは、目に見えないものによって出来上がっている』」「死んだらゼロだよ」「でも、聖書にはこう書いてあります」「なぜ聖書が正しいと言えるんだ？」「聖書はこう言ってます」「きみ、頭大丈夫か？聖書がなぜ正しいのかを『聖書がそう言ってるから』というのは、説明になってないじゃないか」「説明になってると思います」とか言うて。かみ合わないんですね。

やっぱり男性としては、論理的に積み上げた話で、知的にも納得させてほしいわけです。知的に納得するための条件の一つとして、「主観的な説明ではなく、客観的に見て、聖書は正しいと頷かざるをえないという証拠を持って来いや！」それがなかったので、どうせそんな話が延々と続くと思うと面倒くさいと思った。でも、その時の聖書メッセージが預言だったんです。聖書預言。

信頼できる人って、どんな人ですか？言ってることとやってることが一致する人。信頼を積み重ねてきた人が、信頼できる人ですよ。信頼できるお医者さんって、どんなお医者さんですか？信頼を積み上げて、治療実績が非常にいいお医者さんですよ。信頼できる書物って、どんな書物でしょうか？書物に書いてあることが、目に見える実際の世界の中で、文字どおり次々に実現していく本。その書物こそは、信頼に値するんじゃないですか？

私が聖書預言をお話しした時、「そんな話は聞いたことがなかった」ということだったので、今日は預言というか、聖書が歴史を貫く二大原則を語っているという観点で紹介します。

私たちが 24 時間ずっと浴びている力がありますね。引力・重力。

引力・重力は見えないけど、物が下に落ちるのを見ることで、地球に引っ張られているのが分かります。見えない引力は見える物の落下によって存在が分かるように、神は目で見ることはできないけど、神が言われたことばのとおりこの世界が動いて行くとするなら、世界の実際の動きを前もって預言していた聖書の神がおられるとなりませんか？

今日のメッセージにテーマをつけるならこれです。「世界は聖書でできている」

歴史を貫く二大原則について、最初にお話しします。

創世記 12 章

1 主はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」

2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民（くにたみ）とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。

3 わたしはあなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

アブラムはユダヤ人の先祖で、後に名前が変わってアブラハムになります。

アブラハムは今から 4000 年前の人です。

あなたは、アブラハムから出て来るユダヤ人子孫たちを含めていて、神は「ユダヤ民族を祝福する者を祝福し、ユダヤ民族を呪う者をのろう」と言いました。

この時アブラハムは 75 歳ですが、神様の召しに従って、行ったこともない外国に移住します。現在イスラエルの国がある場所ですね。

そこにいる先住民族たちは、それぞれ自分たちの宗教を持っています。

でも、アブラハムと付き合いしていく中で、不思議なことに気づきました。

アブラハムに親切にすると、何か分からんけど、やることなすこと次から次にうまく行く。でも、アブラハムを困らせたり、追い詰めたり、彼の奥さんを妾にしようとしたりすると、次から次におかしな事、不幸な事、トラブルが起こる。

それが 1 回 2 回じゃなくて何十回何百回。いろんな人たちがそれを経験していくのを見るにつけ、「待てよ。もしかすると、我々が先祖から受け継いできた宗教じゃなくて、アブラハムが信じている神こそが本物の神じゃないの？」と、考えがゆっくりゆっくり変わっていくんです。

これはアブラハム時代の人たちだけではなく、人類歴史は「ユダヤ民族を祝福する国は祝福され、呪う国はのろわれる」という**第一原則**で解くことができるんです。

申命記 32 章

8 いと高き方が、国々に相続地を持たせ、人の子らを割り振られたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、もろもろの民の境を決められた。

いと高き方とは神。国力は領土と国民の数で決まりますね。領土と国民の数は、イスラエルの子らの数にしたがって、もろもろの民の境を決められた。

自分の国の中にユダヤ人をたくさん迎え入れている国は大きくなります。豊かになります。国力が繁栄します。貧しかったら、そこにいるユダヤ人たちを養えないからです。ユダヤ人をたくさん抱え込んでいる国は、大きく強く豊かになる。逆に言うと、ユダヤ人を一人もいないように全部追い出して、空っぽにしてしまうと落ちて行く。衰退するということなんですね。これが**第二原則**です。

第一原則▷「ユダヤ人を祝福する者は祝福され、呪う者は呪われる」

第二原則▷「ユダヤ人を迎え入れた国は繁栄するが、追い出した国は衰退する」

これを頭に入れて、世界史をざっと見ていきます。

今、世界中をたった一人の男が振り回してるんですよ。トランプ。

「私が辞書の中で一番好きな言葉はこれだ。“関税”」言うてるんですよ。

同盟国日本に15%、中国に総合関税30%。でも、この総合関税以外に品目別関税がプラスされ、中国の電気自動車がアメリカに入る時、130%の関税が掛かります。とんでもない関税を掛けて、中国と仲良しのブラジルには50%、ロシアと仲良くしているインドにも50%。

いろんな人が交渉しようとするんですが、トランプ大統領に対しては「ハイ」か「YES」しかない。「NO」がないのよ。だから、ある人は「トランプなのにハートがない」と言うんですけど、そんな話じゃないんですよ。

このように、自分の国に有利になるように、自由自在に世界のルールを変えることができる国を覇権国家と言います。派遣社員の「はけん」じゃない。

覇権国家は、その時代における国際社会の親分みたいな、ジャイアンのような、支配的な、自分に有利なように意のままに世界に号令を掛けることができる国です。

覇権国家は現在はアメリカですが、アメリカの前はイギリス。

イギリスの前はオランダ。オランダの前はポルトガルとスペイン。

ポルトガルとスペインの前は、全世界を支配できる覇権国家はありません。

グローバリズムと言いますが、グローブの意味は地球です。地球的規模で何かをする時にグローバリズムと言うんですが、ポルトガルとスペインの前の権力国家は、地球全体のどこにでも駆けつけられるテクノロジーを持ってませんでした。ところが、ポルトガルとスペイン…世界で最初に世界一周したのはスペイン人のマゼラン。それからヴァスコ・ダ・ガマ。コロンブス。彼らは地球半周してやりました。

ポルトガル→スペイン→オランダ→イギリス→アメリカの順番で、覇権国家が移り変わってきた。これはどういうことか。

どんな帝国、どんなに力が強い国も、永久に強いまま留まることはできません。ピークを迎えたら、何らかの原因でシュートと落ちて行く。なぜ落ちるんだろう。

ポルトガル→スペイン→オランダ→イギリス→アメリカの流れについて、特徴が2つあります。

1) 日本に登場した順番

①ポルトガル・スペインが来たのは15～16世紀。非常に繁栄した安土桃山時代。1543年、ポルトガルの貿易商人たちが種子島に漂着しました。その時の種子島の領主／お殿様は種子島 時堯（たねがしま ときたか）。16歳。若いってやっぱりいいですよ。新しもん好きなんですよ。ポルトガルの商人が火縄銃を見せました。それまで日本人が持っていた飛び道具は弓矢とか吹き矢くらいでしょ。デモンストレーションで一発ぶちかましたら、100メートル先の標的が木端微塵。「これ、なんぼすんねん?」「千両でお売りしましょう」今の1億円です。ポルトガルでは一丁70万円で売ってるんですよ。70万で売ってる物を日本に持って来るだけで1億。ぼろいじゃないですか。それを二丁買った。

ポルトガルが伝えた火縄銃によって、日本の流れが激変しました。尾張名古屋の一地方領主にすぎなかった織田信長が天下統一できたのは、どの戦国大名よりも早く鉄砲隊を組織したからです。

②その6年後、スペインが来ます。フランシスコ・ザビエル。カトリックの宣教師。禿げてるような絵がありますが、あれは禿げじゃないんです。光輝いている。いや、禿げてるから光…そういうことじゃない。

ポルトガル商人は漂着ですが、ザビエルは目的意識を持って日本にやって来ました。彼がマラッカで宣教していた時、日本人が来たんです。弥次郎という九州出身の人。殺人事件を犯して捕まったら死刑というので、南蛮船の船長に「日本で処刑されないように守ってください!」乗り込ませてもらって無事に国外逃亡できたんですが、後に良心の呵責が激しくなった。「人を殺めておきながら、罰を免れてのうのうと生活して…なんて嫌な悪い人間なんだ! 苦しい!」良心の悶えに七転八倒している様子に、船長が見るに見かねて「そんなに罪の問題で苦しんでいるなら、あの方に会ったらいい」それがフランシスコ・ザビエル。

ザビエルのところに連れて行ってもらいました。「罪には必ず罰が必要です。罰を受けてないから、あなたの心に平安がない。でも、あなたの罪の罰は、あなたが受けたのではなくて、イエス・キリストが受けてくださった。キリストを信じて、あなたの罪を赦してもらいなさい」そうして信じた後、もっと詳しく知りたいと神学校／聖書学校に行き、中国語とスペイン語をマスターして勉強したんですよ。

今までいろんな国の人たちにキリストを伝えてきたけど、こんなに知的能力が高くて真面目な人は見なかった。「弥次郎さん、日本人みんな、あんたみたいなの?」「だいたいそうですね」と…。「僕なんか、まだまだレベル低い方ですよ」「じゃあ、日本人はキリストを信じるだろうか」「日本人は知的レベルが高いから、納得したら信じると思います」「だったら日本に行こうよ。私は日本に宣教師として進んで行く。一緒に来てくれ!」言われた時、悩むんですねえ。帰ったら死刑。留まったら日本人救われない。行くべきか留まるべきか。この迷った優柔不断の性質から出来たおもちゃが“やじろべえ”です。ほんま。

結局帰るんです。彼らは神をデウスと呼んでました。デウスをどう訳したらいいか。弥次郎が“大日如来（だいにちにょらい）”と訳したんです。仏教の一派ですかと、ものすごい誤解を生むんですね。それで、デウスはデウスのままになりました。

織田信長の時代／安土桃山時代は、スペインとポルトガルが非常に大きな力を持ってました。この国から日本まで2万キロですよ。風の力の帆船で2万キロやって来て、すごいテクノロジーですが、ある時から、ポルトガルもスペインも急に元気を失うんです。

③代わってやって来たのがオランダ。17世紀の覇者です。

日本に来たのはちょうど1600年。関ヶ原の戦いの時、オランダ人の船が漂着したんです。関ヶ原の戦いで、家康が「もう豊臣に勝った。徳川の時代や。これからの日本を考えると、ヨーロッパの最先端技術が欲しい」

それで、よく漂着してくれたと、その船にいたヤン・ヨーステンという人に、「オランダに帰らず日本に残って、家康の外交顧問として働いてくれたら、家・座敷・土地全部プレゼントする」「ほんなら留まりますわ」

それで彼に与えたのが、今の八重洲です。ヤンヨーステン…ヤエス…。

東京に丸の内口と八重洲口あるでしょ。あの八重洲口に彼の屋敷があったんです。

江戸時代はオランダが最高の科学技術の水準を誇っていて、日本全国に蘭学塾が100件できます。中でも最高峰が大阪にあった適塾。大阪大学医学部の前身です。適塾の塾生に福沢諭吉がいて、緒方洪庵が塾長ですよ。

大阪の北浜に現存してます。ぜひ見に行ってください。日本の夜明けを蘭学で学ぼうという人たちが、睡魔と闘って勉強するために、大黒柱を日本刀で切り付けていたんですね。ざっくり切れた刀跡が残っている。どんな勉強やと。

蘭学塾が林立して、勝海舟もオランダ語を学んでやってたんですね。

それで蘭学の知識が日本中に広がり、一般庶民もオランダ語の単語を喋るんですよ。コップ・ガラス・コーヒー・ビスケット・ランドセル・ピンセット・ゴム・メス・オルゴール。全部、英語由来じゃなくてオランダ語由来です。

昔、アントニオ猪木が闘魂注入言うて、バーンとビンタ張るの知りませんか？

あほちゃうかと思うけど、ビンタはオランダ語。だから何なのという話ですが。

ついでに言うと、男勝りで元気な女の子をお転婆（おてんば）と言いますね。

婆さんが転ぶ。なんで？オランダ語で活発な女の子はオーテンブー。これが訛ってオテンバ。婆さんが転んだら骨が折れますよ。何の話や。

そのオランダが、ある日を境にストーンと落ちるんです。

④1808年、オランダに次いで日本にやって来たのがイギリスです。

イギリスはフェートン号で来るんですが、非常に暴力的な登場。

オランダ人は長崎の出島にあった商館で生活してました。

ある時、イギリスの軍艦がオランダの国旗を掲げて、オランダ船になりすまして、出島に入ったんです。そして、出島にいたオランダ人たちを拉致して、連れ去って。日本政府／徳川幕府に対しては、「水・食糧・薪を持って来い！」

あまりにも火力があったので、長崎奉行はなす術もなく言うこと聞くしかなかった。後で、責任取って切腹してます。

なぜそんな酷いことをやったのか。ヨーロッパでは、オランダはとっくの昔に凋落してるんです。この時代、イギリスはナポレオン戦争でフランスと戦って、大勝利を収めました。フランスに付いたのがオランダだったんです。

「おまえ、よくも敵に回ってくれたな」と、オランダが世界中に持っていた植民地や出先機関を、全部奪い取っていったのがイギリス。

イギリスがものすごい力を持って、やがて中国がアヘン戦争を吹っ掛けられます。

⑤ところが、その50年後の1853年、今度はペリーの黒船が来るんです。

「いやでござんす(1853)、ペリーさん。開国したくありません」

ペリーは「1年だけ待ったるから、来年ちゃんと答え出せよ。色好い返事出せへんかったら、おまえら沈めたるぞ」という、まさに砲艦外交。恫喝。

このように、日本にやって来た欧米諸国の順番は、世界の覇権国の順番とドンピシャで合ってるんですが、なぜポルトガル→スペイン→オランダ→イギリス→アメリカの順番になったのかは、これだけでは説明できませんよね。

2) なぜこの順番で覇権国が入れ替わったのか。これを解くカギが、先ほどの聖書の2つのことばなんですよ。1つずつ見ていきます。

①ポルトガルとスペイン

600年くらい前(15~16世紀)、ポルトガルとスペインは、ヨーロッパの中では新しい国でした。イベリア半島はアラブ/イスラムの国々に800年間も占領支配されていたんですが、土地を少しずつ取り戻して独立したんです。

アラブに支配されたイベリア半島の、アッラーと月と羊しかなかったような国が、なぜこんなに文化が発展していったのか。彼らはユダヤ人のブレーンをたくさん抱えていたことが分かったんです。イスラム圏のユダヤ人たちにもものすごく良い条件を出して、引き抜いたんですね。

特に、航海術・天文学・医学に最先端の技術を持つユダヤ人たちを引き抜くことで、ポルトガルとスペインの国力はどんどん上がっていきました。

西回りで行ったのがスペイン。東回りで行ったのがポルトガル。

中南米の国の言葉はポルトガル語かスペイン語でしょ。メキシコはメキシコ語じゃない。スペイン語です。ブラジルはブラジル語じゃない。ポルトガル語。

なぜ、地球の裏側がポルトガル語とスペイン語を話しているのか。

彼らがそこまで行って、植民地にしたからです。そして、世界中の富がこの2つの国に流れ込んで、やりたい放題の限りを尽くしたと言ってもいいでしょう。

ポルトガルとスペインは、ユダヤ人を重用することで世界のトップブランドになったにも拘わらず、富むだけ富んだら、ユダヤ人の世話になったことを忘れた世代の

国王・女王が出て来ました。イサベラとかそういう辺りの人たち。彼らは「ユダヤ人は、キリストを十字架にはりつけた呪われた民族だ」という論理で、自分たちの国から出て行けと。

まずスペインが 1492 年にユダヤ人を追放し、その後ポルトガルも追放します。追放されたユダヤ人はオランダに行きました。オランダとスペインは 80 年も戦争して、オランダはようやくスペインから独立したんです。それで、スペインで虐められていた人たちがオランダに集まりました。その中には、プロテスタントのクリスチャンたちがたくさんいたんですね。

②オランダは小さな国ですよ。北海道の半分くらいしかない。ちなみに、オランダはネーデルランドと言います。オランダと言ってるのは日本くらい。オランダ人が漂着した時、「おまえ、どっから来たん」と聞いたら、ネーデルランドと言わずに、出身地のホランド州と言った。ホランダ…オランダ…国名を聞いたのに地方の名前を聞いて、オランダと定着してしまったというんですね。

ユダヤ人たちがどんどんオランダに来ることによって、世界の富の半分がオランダに集まります。当時、世界には貿易船が全部で 2 万隻ありましたが、そのうち 1 万 6000 隻がオランダの船です。

特にフランシスコ・メンデスという人が、香辛料の貿易で巨万の富を築きました。オランダは北海道の北部と同じくらいの緯度なので、冬場は困るんですね。まだ冷蔵技術がない。魚や肉を塩漬けにして保存するけど、塩漬けだけだと生臭い。それが、胡椒をパパッとかけると、臭みが瞬時に消える。軽くて莫大な富をもたらす胡椒は貿易にもってこいだというので、フランシスコ・メンデスの財閥が巨万の富を持ちます。そして、レンブラントやフェルメールなど芸術家たちのパトロンになるんです。芸術はお金が集まるところで発展しますね。食うや食わずのところでは、あんまり発展しません。

このメンデスはユダヤ人です。スピノザはアムステルダム生まれのユダヤ人。ニュージーランドとオーストラリアを発見したのもオランダです。ニューヨークの前身を造ったのもオランダです。マンハッタン島の南半分をオランダが占領して、ニューアムステルダムという町を造りました。それが後のニューヨークです。マンハッタン島の北と南に壁を造ったんですが、それを取っ払って道路にしました。そこが今のウォールストリートです。ウォールは壁。壁だったところがストリートになったからウォールストリート。今アメリカの金融の中心。ユダヤ系の金融機関が集まってますよね。だれがそこを造ったのか。オランダ系ユダヤ人が移り住んで、今のアメリカの金融の基礎を築いたんですよ。

オランダは非常に豊かで、しかも、ポルトガルやスペインみたいなユダヤ人迫害を、一切しない国なんです。にも拘わらず、ある時からシューっと落ちて行くんですね。ユダヤ人を迫害してないのに、なぜオランダは勢力を落としたのか。

オランダに、マナセ・ベン・エフライムというユダヤ教のラビ／リーダーがいました。彼は聖書預言に精通していて、クリスチャンたちからも「この人の聖書の読みは深いなあ」と尊敬され、一目置かれていた人です。彼は終末預言を信じてたんですね。「世界中に散らされているユダヤ人たちは、やがて先祖がいたところにもう一度国を造る。国ができた後にメシアが到来してユートピアを造る」という聖書預言を信じてるんですが、世界中からユダヤ人が帰る時、どこから帰るのが問題なんです。

申命記 28 章

64 主は地の果てから地の果てまでのあらゆる民の間あなたを散らす。

これは 3500 年前に、モーセを通して与えられた聖書預言です。ユダヤ人は国を失った後に世界中に散らされますが、散らされる場所はイスラエルが元あったところの近所じゃ駄目なんです。彼は「地の果てから地の果てまでのあらゆる民の間にまで、一旦散らないと駄目だ」と読んだんですね。

申命記 30 章

4 たとえ、あなた（ユダヤ民族）が天の果てに追いやられていても、あなたの神、主はそこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻される。

5 あなたの神、主はあなたの先祖が所有していた地にあなたを導き入れ、あなたはそれを所有する。

先祖が所有していた地にあなた（ユダヤ民族）を導き入れる前に、天の果てから帰って来ないと駄目なんです。

③ヨーロッパにはユダヤ人たちが散らばって住んでいましたが、唯一ユダヤ人がいない国がありました。イギリスです。イギリスはドーバー海峡を挟んで北の果て。なぜイギリスにユダヤ人が住んでいないのか。

1290 年、イギリス国王がユダヤ人全員追放の命令を出したんです。

それで、グレートブリテン島にユダヤ人ゼロという時代が 360 年続きました。

マナセ・ベン・エフライムは、「天の果てに追いやられていても、そこからあなたを集めるのだから、この預言が実現するためには、ユダヤ人は一度天の果てから地の果てまで散らばらないと駄目なんだ」と考えたんです。

この時のイギリスのリーダーはクロムウェル（1599-1658）です。

彼はピューリタン革命、ガチガチのプロテスタント原理主義者みたいな人で、額面どおり聖書を信じ、旧約聖書に則ってイギリスを造ろうと考えたほど。

マナセ・ベン・エフライムが「クロムウェルさん、地の果てまで行ったら、この預言が実現します。地の果てってイギリスですよ。入れてくださいよ」「分かった」

私たちは「聖書にこう書いてある。へえー」で終わるんですが、世界のトップリーダーは、聖書で話の決着を着けるとい時代があったんですね。

「聖書にこう書いてある。でも、あなたの国はそうしてない。あなたはするべきじゃないですか」「分かった」

まさに“世界は聖書でできている”ようなことだったんですね。
クロムウェルは徐々に門戸を開きました。ユダヤ人たちは「オランダよりもイギリスに行く方がもっと優遇される。オランダも居心地はいいけど、イギリスの方がもっと素晴らしい待遇を受けられる」と、オランダにいた人たちがザーッとイギリスに行くだけではなく、東ヨーロッパからも南ヨーロッパからも殺到したんです。

同時にイギリスの国力がグーッと上がって、最終的に、イギリスは凄いことをやりました。ユダヤ人の総理大臣を出すんです。世界の中で、医者や弁護士やアートでユダヤ人が活躍するのはあったけど、政治のポストにユダヤ人を就けるのはありませんでした。ユダヤ人は国家への忠誠心を疑われていたから。

だけど、イギリスではディズレーリ（1804-1881）が総理大臣になったんです。ディズレーリはデー・イスレーリ。デーは「〇〇から」という意味。イスレーリはイスラエリー、文字どおりイスラエル。つまり、ディズレーリは“イスラエルから来た人”という意味で、名前見ただけでユダヤ人だと分かる。

彼は総理になってからもいっぱい野次を受けましたが、「おまえユダヤ人だろ！イギリス人じゃねえじゃないか！」みたいに言われた時、「そう。私はユダヤ人です。私の国がエルサレムのソロモン神殿で礼拝していた時、ロンドンはただの沼地や」って言い返したんですよ。鼻柱が強いというか。

ディズレーリが総理大臣になった時、ものすごいことが起こります。1875年、スエズ運河を自分のものにしたんですよ。イギリスが最も儲ける場所はインドです。アフリカ大陸の喜望峰を周るのはメチャクチャ遠回りですが、アジアとアフリカの細い結び目の所に人工水路の運河を造れば、地中海からショートカットでシュッと行ける。近道でアジアに出られる。それはイギリスにとって非常に有利なので、何とかここに運河を掘りたい、造りたいと願っていたんです。

ところが、この利権をもらったのは、最大のライバルであるフランスでした。フランスがスエズ運河を掘ることに成功したのは、イギリスにとって頭の痛い問題です。もしイギリスとフランスが戦争したら、イギリスの船はスエズ運河で通せんぼされますよ。イギリスの大動脈であるスエズ運河が、最大のライバルのフランスの手に握られてる。これは辛い。これは絶対的に不利な段階。

1875年のある日曜日、ディズレーリは同じユダヤ人で銀行家のロスチャイルド／ライオネル・ロスチャイルドと二人で、晩ごはんを食べてました。その時、フランスのロスチャイルドから電報が来たんです。ロスチャイルドの銀行間の電報は、ヘブライ文字と暗号の組み合わせなので、ほかの人が読んでも解読できません。在外高官が外務省に打電するよりも、ロスチャイルドの電報ネットワークの方が早かったと言われてます。彼らは世界中の裏側で何が起きているかを、いの一発でやり取りしてたんですね。食事中に「おお、こんなことが」と言って、それをディズレーリに見せました。

「エジプトが財政難で、スエズ運河の株 44%を売りたいがっている。400 万ポンドだ。フランスはあまりにも値段が高すぎると言って決断を渋っており、いつまでたっても決断できない状態だ」

今 400 万ポンドをポンと出したら、一夜にしてスエズ運河はイギリスのものになる。ディズレーリは「買った！」即断。「秘密閣議で皆の了承を得て、これを買うことにしよう」

お金どうすんねんという話ですよ。この時、イギリス議会は休会中でした。イギリスの法律では、議会議場中は、中央銀行は政府に融資できないという禁止事項があったんです。グズグズしてたらフランスが「買う」って言うかもしれない。早く買わないと。でも、400 万ポンドはだれも出せない。

ディズレーリは翌日、もう一度ロスチャイルドのところに行きます。

「400 万ポンド貸して」400 円じゃない。「400 万ポンド貸して」

「担保は？」「大英帝国」「分かった」その日のうちに振り込んだので、スエズ運河は一夜にしてイギリスのものになり、これを境に大英帝国、7つの海に日が沈まない黄金時代ができ上っていくんですね。

なぜこんなことができたのか。ロスチャイルドというユダヤ人銀行家が情報を持っていた。資金も持っていた。その情報をいち早く聞くことができたのは、ユダヤ人同士だったから。ディズレーリはイギリスの総理大臣だった。

ということで、とんとん拍子に進んだんですが、最も重要なことは、得したのは誰かということです。一番得したのはイギリス国民です。

そして一番すごいのは、「ユダヤ人を祝福する者は祝福される」ということばを文字どおり実現した神だ、ということになるんじゃないですか？

イギリスはますますユダヤ人を優遇するようになり、イスラエルの国を造ってあげるといふバルフォア宣言を出します。しかし、途中でこれをひっくり返しました。第二次世界大戦で、ナチスドイツと戦争するようになったからです。

ナチスドイツはイギリスと戦う時にスエズ運河を狙う。

「ユダヤ人の国を造ります」なんてことを言うと、スエズ運河の近所に住んでいるアラブ人たちは、反乱を起こすんじゃないですか？なので、約束を破った。

ヨーロッパにいたユダヤ人たちが 600 万人殺されている時でも、彼らを約束の地に入れなかったんですね。裏切ったということです。

ユダヤ人を優遇していた時は良かったけど、ユダヤ人を追放すると同時にイギリスの凋落が始まり、第二次世界大戦でイギリスは戦勝国ですが、覇権がポンドからドルに代わったんです。

そして、戦争終了後 10 年経っても、国民への食糧配給をやめられませんでした。もう貧しかったんです。一応勝ったけど、敗戦国みたいな勝ちになってしまった。

戦争前は 950 万人のユダヤ人がヨーロッパにいましたが、そのうちの 600 万人がナチスの強制収容所で殺されました。残った 350 万人は DP キャンプに行ったんです。

